The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	真珠と16世紀ヨーロッパの対外拡張ー真珠のコモディティ・チェーンからの考察ー
Author(s)	山田, 篤美
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85253
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　山田篤美　）	
論文題名	真珠と16世紀ヨーロッパの対外拡張 ――真珠のコモディティ・チェーンからの考察――

論文内容の要旨

日本の養殖真珠技術が成功する以前、南米カリブ海、ペルシア湾、インドとスリランカの間のマンナール湾は、アコヤ系真珠が採れるアコヤ真珠貝の大産地だった。本研究は、１６世紀に南米カリブ海沿岸に進出したスペイン勢力の対外拡張及びペルシア湾島嶼とマンナール湾岸に進出したポルトガル勢力の対外拡張を対象として、なぜヨーロッパ勢力は真珠の大産地に進出していったのか、なぜこれらの産地やその真珠は彼らにとって重要であったのか、彼らはそうした海域世界からどのように富を引き出したのか、という問題提起を行った。さらに、真珠は、１６世紀世界に何をもたらし、何をどう変えたのか、真珠によるグローバル化はあったのかという問いも設定した。真珠という物品はこれまで歴史学で看過されてきたので、真珠を通して１６世紀史を見ることで、さまざまな歴史的事象の解釈が、従来とは異なってくる可能性があったからである。

本研究は、こうした問いに答えるために、一国史を超え、海域と湾岸世界を一帯と見る広域俯瞰とコモディティ・チェーン分析を取り入れ、１６世紀の一次史料を広範に検討した。また、真珠の生態系についての正しい解釈と最新の水産学的知見の導入、以下に述べる*aljofar*という語の正確な解釈を実施した。具体的な内容は以下のとおりである。

序章では、アコヤ真珠貝とアコヤ系真珠の生態系的事実を整理・概観し、これまでの真珠史研究の概要を説明した上で、１６世紀の南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾に焦点を当てた真珠史研究の問題点を指摘した。さらに、農産物ではなく、消耗品でもない真珠という物品のコモディティ・チェーン分析のために、生産面では「真珠生産圏」、希求面では「伝統的希求地／希求者」、「新興希求地／希求者」、「上位集散地」の概念を提唱した。密輸の横行によって把握が難しい真珠の流通については、「真珠生産圏」をハブとして、車輪のスポークのように「希求地／希求者」に届く流通があったと考え、「ハブ・アンド・スポーク交易」という概念を打ち出した。本研究はこれらの概念に基づき、それぞれの真珠の大産地における真珠のコモディティ・チェーンを検討した。

第一章と第二章では、先行研究で誤謬が少なくない真珠の生態系と真珠に関する語についてそれぞれ事実確認を行った。これは本研究の議論の前提となる作業であった。まず、第一章では、アコヤ系真珠の大きさとその出現率について、欧米の研究者が参照してこなかった日本の調査報告などを中心に分析した。その結果、（１）商業的に利用されてきたアコヤ系真珠の平均的な大きさは、直径３ミリから６ミリ台であること、（２）直径５ミリの真珠の出現率は、0.015パーセント程度であることを解明した。天然のアコヤ系真珠は海産真珠の中で出現率がもっとも高いが、本研究によって具体的な数字が明らかになった。これにより、本研究は、アコヤ系真珠は、生産量の多さから商人の扱う商品であり、真珠のコモディティ・チェーン分析の対象とするのに適した海産真珠であることを確認した。

第二章では、１６世紀のスペイン語とポルトガル語で使われた、真珠を指す*aljofar*という語について検討した。これまで*aljofar* は*seed pearls* と訳されてきたが、本研究は、ラテン語文献やアラビア語文献、１６世紀のポルトガル語文献の真珠の語彙などを分析することで、*aljofar*は「普通の」真珠を意味していることを論証し、さらに１６世紀のスペイン語文献やポルトガル語文献では、*aljofar*は多くの場合、アコヤ系真珠を指すことを明らかにした。*aljofar*を「真珠」と見なした真珠史研究は、本研究が初めてであり、１６世紀の真珠世界を正確に構築することが可能となった。

第三章では、まず、コロン来航以前の南米カリブ海沿岸部では、先住民による真珠の採取や取引がある「南米カリブ海真珠生産圏」が形成されていたことを明らかにした。本研究は、大航海時代黎明期の真珠の価格はきわめて高かったことを論証し、真珠獲得による致富への思いが「南米カリブ海真珠生産圏」へのスペイン人の進出、征服、入植活動となり、大航海時代を促進する要因のひとつになったことを明らかにした。本研究は、「南米カリブ海真珠生産圏」というアコヤ系真珠の生息する海域とその沿岸部には、真珠の採取という漁撈文化があったため、経済的重要性、地政学的重要性があったことを解明した。

さらに、第三章では、南米カリブ海の真珠のコモディティ・チェーンの実態を検討した。生産については、スペイン人が生産者になる真珠採取業という水産業が勃興したが、それは国家の強い介入がある水産業であり、ポトシ銀山発見以前のスペイン領アメリカの富の源泉となったことを明らかにした。潜水労働者に関しては、ラス・カサスの『インディアス史』を参照し、初期には先住民奴隷が真珠採取に投入される「先住民奴隷制水産業」として発展したが、それがバハマ諸島の先住民の絶滅につながったこと、その後は「黒人奴隷制水産業」に移行したが、それはスペイン王室の意向だったことを論証した。本研究により、真珠が先住民の人口動態に大きな変化を与えたことが判明した。真珠の希求と流通では、ヨーロッパが真珠の「新興希求者」となり、真珠は大西洋貿易の重要な商品となったことを

確認した。

第四章では、ペルシア湾とその島嶼部ではアコヤ系真珠の「真珠生産圏」が形成されていたこと、１６世紀初期のポルトガル人にとっても、スパイスだけでなく、真珠の入手が航海の動機のひとつであったことを明らかにした。さらに、初期ポルトガル人の対外拡張には、真珠の採れる海域支配と真珠採取業の掌握という構想があり、彼らは海を富の源泉として見ており、「真珠生産圏」には地政学的重要性があったことを解明した。本研究は、ポルトガルの「ペルシア湾真珠生産圏」支配は、真珠集散地のホルムズ支配とホルムズによる真珠採取地バハレーンの間接支配からなっており、これによってポルトガル勢力は真珠だけでなく、金や銀、とりわけペルシアのラリン銀貨も獲得したことを解明した。

「ペルシア湾真珠生産圏」のコモディティ・チェーンの分析では、アラブ系・ペルシア系の商人たちが前金で潜水労働者を囲い込む「債務隷属制真珠採取業」を実施していたため、ポルトガル人による水産業は発達しなかったこと、ペルシア湾の真珠は，ポルトガル人という「新興希求者」の他、多くのアジアの「伝統的希求地／希求者」を擁する国際商品であったこと、その流通はアジア各地と接続するトランスリージョナルな流通網を構築していたことを明らかにした。ポルトガル勢力は「ペルシア湾真珠生産圏」を支配することで、真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」の中心にいたことが判明した。

第五章では、１６世紀初頭のマンナール湾岸世界には「真珠生産圏」が形成されており、真珠採取は宗教にかかわらず、タミル系潜水夫の独壇場であり、民族性が強いことを解明した。また、「マンナール湾真珠生産圏」へのポルトガルの進出は、宗教勢力が加わったことで特色づけられるが、広域俯瞰で進出経緯とその実態を検討すると、ポルトガルの政治勢力も宗教勢力も、真珠採取地における真珠採り潜水夫の改宗とその支配を実現したことが明らかになった。本研究は、イエズス会は温情主義によって真珠採り潜水夫の絶対的帰依を勝ち取ったが、それはイエズス会、ひいてはポルトガル勢力が、彼らに協力的な真珠採取の潜水労働力を確保できたことを意味しており、イエズス会も真珠獲得という経済的な利益を得たことを解明した。さらに、ポルトガルはマンナール島を領有することで、マンナール湾をポルトガルの版図と見なすようになり、真珠の大規模採取期には、ポルトガル植民地政府、ポルトガル艦隊、イエズス会は「官・軍・宗教共同体」となって潜水夫を使役・保護する真珠採取を実施したことを論証した。

マンナール湾の真珠の希求と流通では、インド全土が「伝統的希求地」であり、民族性が強いこと、その流通についてもタミル系の民族性が強いことを解明した。そのことは、ポルトガル勢力は「マンナール湾真珠生産圏」を政治的・軍事的・宗教的に支配したことで、インド域内交易を中心とする真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」で大きな存在感を示したことを明らかにした。

第六章では、ゴアは「ペルシア湾真珠生産圏」、「マンナール湾真珠生産圏」だけでなく、「南米カリブ海真珠生産圏」からもアコヤ系真珠を集める「上位集散地」となり、さらに地球規模で多種多様の真珠を集め、アメリカ、ヨーロッパ、アジアと接続する「グローバル市場」になったことを論証した。この考察によって、世界各地の産地からひとつの商品を集約する、商品の拡散とは異なる「グローバル化」の経済発展の事例があることを明らかにした。また、民間ポルトガル商人は、真珠の嗜好の地域間格差を利用して、利益を得る「グローバル思考」を培い、グジャラートのバニヤン商人はゴアに進出することで、真珠の小売商として成長したことを論証した。アジア世界における真珠の「グローバル市場」の成立は、史上初の出来事であったが、それはイベリア半島の二大帝国とその商人、アジアの諸王朝と現地商人というヨーロッパの国家と商人、アジアの国家と商人の相互連関、相互依存によって実現した歴史的事象だった。

補論では、大航海時代黎明期の真珠の価格と１６世紀末の真珠の価格を比較することで、真珠の供給量が増えた割には真珠の価格は下がっていないことを明らかにした。

以上の検討で明らかになったことは、スペイン帝国とポルトガル海洋帝国によるアコヤ系真珠の「三大生産圏」への進出とその支配は、大量の真珠獲得によるヨーロッパ人の致富の実現、真珠ゆえの対外拡張と入植活動、真珠採取業という水産業の実施、真珠による新世界の先住民の絶滅とアフリカ人奴隷貿易の実施、アジア域内交易の真珠取引におけるヨーロッパ人の相対的優位、真珠ゆえの現地潜水夫のキリスト教化、真珠によるグローバル市場の誕生など、さまざまな側面での政治的・経済的・社会的・宗教的変化をもたらしたことである。

これまで１６世紀の大航海時代は、ヨーロッパ人の金とスパイスの渇望、疫病による先住民の絶滅や激減、砂糖プランテーションによるアフリカ人奴隷制の発展、海上交通の場としての海域の重要性、アジア交易におけるポルトガル人の二義的役割などで語られてきたが、本研究が解明した事実は真珠という物品と富の源泉としての海域の重要性を明らかにし、従来の叙述の見直しを迫ることになる。アコヤ系真珠はわずか３ミリから６ミリ程度の小さな商品であるが、その真珠が動かした大航海時代の歴史があったことが判明した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　山田　篤美　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	秋田　茂
	副 査	大阪大学　教授	藤川　隆男
	副 査	大阪大学　教授	桃木　至朗
	副 査	大阪大学　准教授	中谷　惣

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　真珠と 16 世紀ヨーロッパの対外拡張
—真珠のコモディティ・チェーンからの考察—

学位申請者　山田篤美
論文審査担当者
主査　大阪大学教授　秋田　茂
副査　大阪大学教授　藤川隆男
副査　大阪大学教授　桃木至朗
副査　大阪大学准教授　中谷　惣

【論文内容の要旨】

本論文は、学位申請者が過去約 20 年にわたって行ってきた、真珠と 16 世紀のヨーロッパの対外拡張の関係性を、「コモディティ・チェーン」（商品連鎖）概念を基軸として解明した、真珠のグローバルヒストリー研究である。論文は、序章に続き、全６章、終章および補論からなり、400 字原稿用紙で約 1000 枚におよぶ大作である。

本論に先立ち、序章では、真珠が従来の歴史研究でなぜ等閑視されてきたのか、仮説（奢侈品の軽視、海域史研究の軽視、水産学研究の無視）を提示し、本論文の研究課題を設定する。研究手法として、グローバル経済史研究で用いられてきた「コモディティティ・チェーン」論を活用し、16 世紀における真珠の「生産＝流通＝希求（消費）」の連鎖を解明するための方法論を明確にする。

第１章「生体物としての真珠」では、日本の水産学研究の成果に着目し、研究対象がアコヤ系真珠であること、第２章「*aljofar* とは何か？」では、なぜ先行研究で真珠が無視されてきたのか、その語源にまでさかのぼって、アコヤ系真珠に対する誤解を説明する。

続く第３章から第６章までが本論で、スペインが支配した南米カリブ海域世界、ポルトガル勢力が支配したペルシャ湾と南アジア・マンナール湾のインド洋海域世界、以上三つの主要な真珠生産海域における「コモディティティ・チェーン」を、比較史的に論じる。

第３章「南米カリブ真珠生産圏」では、新大陸での銀獲得以前にはカリブ海域の真珠が、スペイン帝国の最大の収益源であり、そのため先住民や黒人奴隷を犠牲にした過酷な「奴隷制水産業」が展開されたことを、ラス・カサスの『インディアス史』の再解釈等を通じて論証する。第４・５章では、ポルトガル勢力が支配したインド洋海域における真珠の二大産地を取り上げる。第４章「ペルシャ湾真珠生産圏」は、バハレーンとホルムズを中心とするペルシャ湾岸へのポルトガルの進出が、真珠獲得を主要目的としたものであり、現地のアラブ系・ペルシャ系商人による「債務奴隷制真珠採取業」を活用した、ポルトガル勢力による真珠獲得と地域横断的（トランスリージョナル）な真珠流通網の構築が明らかにされる。第５章「マンナール湾真珠生産圏」では、タミル系商人が優位であったインド半島南部地域へのポルトガル勢力進出の要因として、真珠獲得を重視する。特に同地域では、イエズス会によるキリスト教布教と連動した「官・軍・宗教共同体」による、現地人潜水夫を使役した真珠採取が実施された点が強調される。

第６章「16 世紀のゴア」は、上記の三大真珠生産圏からの真珠が、ポルトガル支配下に置かれたゴアに集積された流通面が描かれる。当時のゴアでは、ポルトガル人だけでなく、多彩な商人層が集まり真珠を取引した、真珠

の「グローバル市場」が出現した点が明らかにされる。補論「16 世紀後半の真珠の価格」は、16 世紀を通じて真珠の供給量が増えたにもかかわらず価格は低下していない点と、その価格維持の要因を分析する。

終章「比較史的考察、16 世紀における真珠の意義」では、以上の議論を改めて要約し、ポルトガル・スペイン勢力を中心とした真珠生産の海域支配と流通網の確立を通じて、アメリカ・ヨーロッパ・アフリカ・アジアの４大陸と諸地域・海域を連関する、部分的なグローバル化が進展したこと、ポルトガル海洋帝国の過少評価の見直しを主張する。

【論文審査の結果の要旨】

16 世紀の真珠交易を中心に出現した「世界市場」形成の端緒を、ポルトガル・スペイン両勢力の海域支配と絡めて、グローバルヒストリー研究の手法を駆使して描いた優れた研究である。

第一に、「コモディティティ・チェーン」論を採用することで、真珠をめぐる生産＝流通＝消費（希求）を一体的に捉え、真珠を商品として位置付けた点が先行研究と大きく異なる。真珠の商品（モノ）としての特異性を説明するため。「真珠生産圏」「希求者」「上位集散地」「ハブ・アンド・スポーク交易」など、独自の分析概念を創出した点は評価できる。本論文の最大の特徴は、従来ばらばらに論じられてきた主要な真珠生産地の歴史を、地域横断的で一国史的な分析枠組みを超える広域の「海域史」の枠組みで捉え直し、比較と関係性の観点から相互につなぎ合わせて、一つのまとまった歴史像、新大陸を含めたグローバル化の原型・端緒を提示した点にある。特に、真珠の生産面で決定的に重要であった、潜水労働者の労務管理に関する比較分析は優れている。

第二に、日本では優れた実績がある、真珠養殖に関する水産学の知見を取り入れて、アコヤ系真珠の世界史的な重要性を明確にした点にも、独創性がある。歴史学と水産学との接合を通じて、先行研究では見落とされてきた諸史料の再解釈も可能になり、奢侈品や威信財としてだけでなく、世界市場での一定の取引・流通を伴う商品（モノ）としての真珠の社会経済的な価値が明らかになった。

第三に、本論文は、ポルトガル語、スペイン語での既刊（編集済み）の 16 世紀同時代史料だけでなく、アラビア語、ペルシャ語、中国語史料の部分的活用も含めて、多言語を駆使した研究である。ラス・カサスの『インディアス史』のような良く知られた史料を新たな角度・視角から読み直すことで、独自の解釈を展開している。

本論文の独創性とメリットは、以上の三点に要約できるが、問題が全くないわけではない。第一に、本論文では分析のキイ概念として「コモディティティ・チェーン」が使われているが、史料的な限界もあって、真珠の流通・希求（消費）面の分析は不十分である。特に、流通の核になった、アジア現地商人も含めた多彩な商人層の活動、「グローバル市場」であるはずのゴア真珠市場の実態が十分に描かれていない。この問題は、学位申請者が徹底的なアーカイヴ研究を行っていない点に原因があり、将来の研究課題として残されている。

第二に、16 世紀におけるポルトガル勢力の海外進出の再評価に力点を置きすぎて、ポルトガル勢力が抱えていた限界や、特に、「アジアの海」であったインド洋世界における現地人諸勢力とポルトガル勢力との、妥協や協調の側面の分析が欠落している。ポルトガルの「優位」は、「点（拠点となる港市）と線（主要航路）」を押さえる限定的なものであったし、ゴア市場自体も、アジアの諸商人との協力・協調がなければ成り立たない構造的な脆弱性を抱えていた。グローバルヒストリー研究の最先端は、そうした複合的な関係性を、現地側の多彩な史資料を活用した地域研究の成果を組み込んで解明している。本論文の第４章―６章では、イスラーム研究や南アジア地域研究の成果との接合が不可欠になる。

しかし、そうした諸課題のために、比較史的手法により 16 世紀の真珠の世界史を描いた本論文の価値が大きく損なわれるものではない。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。